Ⅲ　大学進学相談における聞き取り調査

Ⅲ－１．発達障害のある生徒の進学等に関する相談

福井県教育庁高校教育課主催の高等学校の相談担当者及び特別支援コーディネータを対象とした巡回教育相談会で「発達障害のある生徒の進学等に関する相談」として３件の大学進学相談を受けた。また、富山大学を志望校の一つにしている発達障害生徒がオープンキャンパスに参加した際に聞き取り調査を行った。

Ⅲ－２．調査結果　（※すべての事例は、特定できないように脚色してある。）

＜巡回教育相談会から：高校３年生Ａさんのケース＞

- 経緯：中学入学後にＡＳＤと診断。高校１年の時は相談室で過ごすことが多かったが、２年から明るくなる。しかし３年になって家庭で進路のことなどで保護者と意見が合わず、時にはけんかになることもある。Ａさんは理系科目が苦手で、興味の面でも文系に進みたいが、保護者は理系を進めている。保護者は進学後の支援の有無を非常に心配している。
- 支援ニーズ：保護者とＡさんの進学希望先のずれで、担任が進路指導（保護者とも）しづらい。Ａさんのやる気も落ちてきて、今担任として生活面と進路のどちらからサポートすればいいのか分からない。
- 対応案：担任からの意見が保護者に伝わりにくければ専門機関に仲介に入ってもらうのもいい。また、Ａさんだけではないが生活上の問題は今ある（進路の）問題が絡んでいるので、むしろ進路目標によってモチベーションを挙げるほうが効果的だろうと担任と合意。

＜巡回教育相談会から：高校３年生Ｂさんのケース＞

- 経緯：診断は受けていないが、変化に弱く、入学当初はトイレや体育館裏にこもることもあった。クラスメートとの会話も非常に少ないが、高校 2 年次までは、なんとか教室にも居場所があり行事にも参加していた。

  ３年になり授業中や休み時間に机に伏せている事が多くなり、本人・保護者ともに大学進学を考えているが、最近は成績が落ちてきていて希望の大学への進学は難しくなってきている。
- 支援ニーズ：担任から見て、高校での適応にも時間がかかっており、大学進学は履修システムや教室移動など変化が大きいので、適応できるかとても不安。県外

- 対応案：会話によるコミュニケーションが苦手ということで、担任と本人双方で話題や考えを書きだしていきながらまとめていってはどうか。進路指導ではまず保護者の不安に寄り添いながら、担任と保護者の双方が本人に対する気付きを共有していくことで支援の糸口を見つけていくことになった。

＜当大学を志望校にしている高校３年生Ｃさんのケース＞

- 経緯：高校１年次に登校できなくなり医療機関を受診。その後、地域の発達障害支援の専門家にＡＳＤの可能性を示唆される。高校３年になりその地域の専門家との面談の中で、その時の進学先が保護者の希望で、Ｃさんの希望先は違うことが分かる。保護者と地域専門家との相談の結果、Ｃさんの希望を尊重することになり、地域専門家を通じ当大学と連携することとなる。
- 支援ニーズ： 県外からの受験希望者ということで、早期に支援窓口を案内してもらい、大学のイメージと支援の情報を得ることで、大学選びの一助にしたいとのことであった。
- 対応案：Ｃさんにオープンキャンパスへの参加を勧め、その際当支援室スタッフと顔合わせをして雑談することにした。Ｃさんからはオープンキャンパスでの全体説明では分からなかった入試の詳細や、入学後のコース変更について確認したいということであった。また、入学後の一人暮らしに不安があり、下宿先情報など事前に相談にのることになった。また、スタッフから入学後に考えられる修学支援について簡単に説明し、富山大学への入学が決定した際に入学前から連携・支援を始められるよう支援窓口となるトータルコミュニケーション支援室のパンフレットを渡した。

Ⅲ－３．考察

全国ＬＤ親の会が２００８年に発刊した「＜総合版＞ＬＤ等の発達障害のある高校生の実態調査報告書」では、高校卒業後の進路選択について保護者が最も困っていることは、「本人の適性がわからない」であり、実に半数以上の保護者がそう感じている。

今回の発達障害のある生徒の進学相談でも、この調査結果を裏付けるように本人と保護者の希望進学先にずれがあり、本人と進学先との適性に対しても不安が伺えた。また、同

様に進路指導担当教員や担任にとっても学校現場での本人の困り感やある程度の適性はわかっても、大学での受入体制や学部毎のカラーの違いが高校側から見えないことで、本人、保護者にどんな情報を伝えていくべきか分からないというのが現状であろう。

そういった中で３つ目のＣさんのケースでは、地域の専門家による面談及びアセスメントから本人が本当に学びたい学問分野を見つけ出し、保護者と本人の進学先のずれから生じる摩擦を取り除き、進学・学習に対するやる気を取り戻したという、非常に貴重なケースであるといえ、適切なアセスメントと連携によって、保護者や高校の不安を軽減できる可能性があるといえるだろう。（※ケース３については富山大学に合格し入学が決まったため、引き続き大学への移行支援を行うことにしている。）